



お達者で



川崎ゆきお

世の中には達者な人がいる。元気な人が。ただ、これが老人になると、別の意味にもとれる。

「ここだけの話なので、言わないでくださいよ」

「はい」

二人の老人が喫茶店で話している。ここが朝の集会場所になっており、ちょっとしたサークルで十人ほどいる。すべて同じ会社の退職者だ。OB会のようなものだろう。年齢制限はないが毎年退職者が出る。高齢で来られなくなる人も出る。その出入りで十人前後だろうか。

いつも早く来て座っている平田老人は真面目な人だ。誰かが先に来ていないと、テーブルがふさがりためだ。多いときは十人近く集まるので。

そこに新顔の竹中が来た。もし竹中が先なら、ひとりぼっちだ。そのため、平田老人が早く来て、先に場を作っているのだ。

そこで、いきなり、ここだけの話を始めた。

「あの人は達者な人でねえ」

ここで、達者が出る。

「元気な人だよ」

「知ってます」新人も知っているようだ。

「そうかい」

「会社の宴会なんかで、酔えばその話がよく出ましたよ。だから、私も知ってますよ。お達者なことが」

達者に、お、が付くと、もう怪しい。

「そうなんだよ。朝の集まりでは、そんなこといっさい言わない人だけど、飲むと言い出すねえ。あれは何だろう」

「さあ」

「まあ、あの人はそういう人だから、それをちょっと耳に入れたかっただけだよ。知っているなら、それでいいけど」

「はい」

「車ですーと入っていけるところがあるだろ」

「はあ？」

「あの人、そこへ入ったらしいよ」

「その話は聞いていません」

「最近のことだから」

「最近って、かなりお年でしょ。あの人」

「だから、達者なんだ」

「はい」

「あそこは顔を見られないらしいよ」

「そうですねえ。それで誰と」

「決まってるよ」

「そっちの人ですね」

「駅裏の繁華街に喫茶店があったでしょ」

「何店もありましたよ」

「そういう喫茶店じゃなく、デート喫茶だよ」

「ああ、ありましたねえ。チラシが電柱に貼ってありましたよ。以前はノーパン喫茶がありましたねえ。あれは衛生上好ましくないですよ」

「よく覚えているじゃないか」

「いえいえ」

「あそこの喫茶店でお見合いするんだ」

「誰と」

「だから、お相手とだよ」

「はいはい」

「当然、店が準備した人でね。ガラス越しに待機している人が見えるんだ。それで指名する。すると、相手がテーブルに来る。そこで交渉だね」

「よくご存じで」

「聞いた話だよ。それも、あの人から」

「実は僕も行ったことがあるんです」

「そうなの」

「間違って」

「間違う訳ないだろ」

「本当に間違って。だから、コーヒーだけ飲んで帰りましたが、そのコーヒーがうまいんです」

「ほう」

「出会い喫茶、デート喫茶のコーヒーがうまいとは初耳だねえ」

「これは噂なんです」

「え、どんな」

「だから、コーヒーのです」

「ああ」

「そのコーヒー、自販機のコーヒーなんです。だから、並の喫茶店のコーヒーよりうまいんだと」

「そうなの、その話は、もういいよ。あの人だよ」

「ああ、はい」

「あの人、そこでうまいこと行ったと言ってたねえ。それはもうかなり前の話だけど。当然すぐにつぶれたからねえ」

「そうですねえ」

「上手く行ったも何もないよ。金さえ出せば良いんだから」

「はい」

「えーと、なんだっけ」

「あの人、最近車ですーと入れるところへ行った話でしょ」

「そうそう。だから、相手はその種の人だと思うんだ」

「それは、あの人、言わないのですか」

「ああ、ほのめかすだけだよ。しかし、プロだろ」

「ホテトル、ホテヘル、デルヘル系じゃないですか」

「詳しいねえ」

「いえいえ」

「とにかくあのお年で達者な人なんだ。それを覚えておいてくれ」

「あ、はい」

「でも、元気ですねえ。まだあの人」

「困ったものだ」

「健康でいいじゃないですか」

「何が健康だ」

「いつまでもお達者で」

了